

## ボンヘッファーの「責任を負う生」と行動

逢坂暁乃(早稲田大学)

本発表の目的は、反ナチ抵抗運動に身を投じた神学者ディートリヒ・ボンヘッファーが草稿「歴史と善 Die Geschichte und das Gute」のなかで構想した「責任を負う生 Verantwortliches Leben」を検討することで、ボンヘッファーのキリスト教倫理がどのように現実における行動を重視するに至るのかを明らかにすることである。ナチスが台頭した当時のドイツではナチズムに迎合するあるいは無関心を貫くキリスト者も多くいたが、ボンヘッファーはキリスト者であるからこそ現実における行動を重視する道を選び反ナチ抵抗運動に参加した。様々な形で存在していた反ナチ抵抗運動のなかでも、ボンヘッファーはヒトラーの暗殺計画をも辞さないグループに所属していたのである。ボンヘッファーのなかで、暴力を否定する自身のキリスト教信仰と自身が参加する反ナチ抵抗運動との間で葛藤がなかったわけでは決していない。そうした状況のなかで、ボンヘッファーはキリスト教倫理にまつわる草稿をいくつも書き記している。これらの草稿を、ボンヘッファーの親友でありボンヘッファー研究の第一人者でもあるエーパハルト・ベートゲが編纂したのが『倫理 Ethik』であり、本発表で取り扱う「歴史と善」も『倫理』に収録されている。

「歴史と善」には、「責任を負う生の構造 Die Struktur des verantwortlichen Lebens」と「責任の場所 Der Ort der Verantwortung」の二つの節がある。「責任を負う生の構造」では、「束縛 Bindung」と「自由 Freiheit」を軸として、「責任の場所」では「召命 Beruf」を軸としてキリスト教倫理が語られている。本発表は、「責任を負う生の構造」の節を検討することで、「責任を負う生」とは何であるのかを明らかにする。なぜならば、この「責任を負う生」及び責任を負う生に関する考察のなかでうちだされた「罪の引き受け」という倫理のあり方こそが、キリスト教信仰と反ナチ抵抗運動との間で葛藤したボンヘッファーの倫理的土台として非常に重要となるからである。「責任を負う生の構造」では束縛と自由が軸となっているが、それは「責任を負う生」が束縛と自由によって成り立つとされているからである。この束縛と自由は別個のものとして「責任を負う生」に関わるのではない。束縛されることによってだけ生における自由が生み出されるとボンヘッファーは考える。そこで本発表では、ボンヘッファーが考える「責任を負う生」における束縛と自由について、第一に束縛を、第二に束縛をふまえたうえで考えられる倫理について、最後にこうした束縛によって生み出される自由を検討したうえで、責任を負う生から理解できるボンヘッファー倫理学と現実における行動、つまりは実践との結びつきを明らかにし、結びとする構成を予定している。

ボンヘッファーの考える束縛とは、神と人間によって生が束縛されていることである。さらにこの束縛は、「代理 Stellvertretung」と「現実に対する即応性 Wirklichkeitsgemäßheit」の二つの形を取る。一方自由は、自身の生と行為に対する自由である。そしてこの自由は、生と行為に対する「自己吟味 Selbstprüfung」と具体的な決断の「冒険 Wagnis」の二つの形を取る。

まず、ボンヘッファーは責任を負う根拠を「代理」にみる。誰かのために、誰かにかかわって倫理的行動をする、それこそが代理である。そうした代理においては、倫理的行動の主体は誰とも交わらない「孤独な個人」ではない。そうではなく「責任を負う主体」が倫理的行為の主体となる。ここで考えられる責任を負う主体と

は、集団、集団の集まり、一個人、なんであれ該当する。だが、そのどれであっても誰かと交わりを持つことが重視されているとともに、倫理的行動の主体たりえない「孤独な個人」であるということはあるかないかということもボンヘッファーは主張する。つまり、ボンヘッファーが代理において重視するのは、交わり、人間と人間との関係であり、代理に基づいて考えられる責任は、人間の人間に対する責任である。また、こうした責任ある人間の行動は、現実において、与えられた状況によって決定される。そこでボンヘッファーが考えるのが「現実に対する即応性」である。これは単に現実をそのまま受け入れるということではない。与えられた現実・状況に対して、それを何らかの法則に基づいて排するという形でなく、そのなかでなにをなすべきかを考えるため、行為を具体的な形にするために現実に対する即応性は必要となる。

ボンヘッファーの責任は、キリストが人間のために負った責任に基づいている。これは徹底してキリスト教信仰に依るものではあるが、ボンヘッファーのキリスト教倫理で着目すべき点は、キリストや神学に責任の根拠を見出しながらも、その実践の領域が現実の場であることが強調され、人間相互の関係にこそ責任を負う場を置いている点である。それゆえに、ボンヘッファーの「責任を負う生」における倫理は政治や国家をも視野に入り、現実の場における倫理的実践だけでなく、政治批判にも発展する。

最終的に「責任を負う生」のなかで、「罪を引き受ける用意と自由」について語られる。罪なき者として生き続けることを望むのではなく、現実の人間を愛するからこそ、人間の罪を引き受け、罪との交わりにも入りゆく必要がある。こうした「罪の引き受け」こそが、ボンヘッファーがキリスト者である自分と、反ナチ抵抗運動に参加する自分との間の葛藤の末に結実したボンヘッファーのキリスト教倫理の核心である。ボンヘッファーは罪の引き受けを、束縛よりも自由という形で語った。というのも、罪の引き受けは、むしろ人間の自由によってこそ為すことができるとボンヘッファーは考えるからである。また、「責任を負う生」における良心について考察したが、この良心もまた「罪の引き受け」を考えるにあたって重要である。ここでの良心とは自己の実存との一致を求める声だと考えられる。こうした良心こそが「罪の引き受け」にあっても、なんであれ単に悪いとされていることを引き受けるという形ではなく、自己の実存との一致に従って罪を引き受けるとして善や法則との関係のなかに「罪の引き受け」を置かせるのである。ボンヘッファーのキリスト教倫理は、その根拠を徹底してキリストに置いてはいるものの、そのなかで語られる倫理と実践の結びつき自体は、キリスト者だけでなく非キリスト者であっても参照することができるものである。本発表では、ボンヘッファーの「責任を負う生」の考察を通して、倫理はいかにして現実における行動・実践を導くのかを検討することを目指す。

### ・参考文献

Dietrich Bonhoeffer, *Dietrich Bonhoeffer Werke Bd. 6, Ethik*, zusammengestellt und herausgegeben von Eberhard Bethge, Gütersloher Verlagshaus, Gütersloh, 2015, 森野善右衛門訳『ボンヘッファー選集4 現代キリスト教倫理』新教出版社, 1962年。

Eberhard Bethge, *Bonhoeffer Theologe-Christ-Zeitgenosse*, Chr. Kaiser Verlag, München, 1967.

Ernst Feil, *Die Theologie Dietrich Bonhoeffers: Hermeneutik, Christologie, Weltverständnis*, Chr. Kaiser Verlag, München, 1991.